
バンベルク大聖堂の《騎馬像》

—雅歌に由来するイメージ・プログラムとしての解釈の試み

仲間 絢

発表要旨

ドイツ中世ゴシック彫刻のバンベルク大聖堂《騎馬像》(1227-29年頃)は、先行研究において長く議論されてきたが、《騎馬像》やその属するバンベルク大聖堂の聖ゲオルク内陣障壁彫刻のイメージ・プログラム全体の構造も、未だ解明されていない。

本発表は、《騎馬像》を、ゴシック美術の中心に置かれてきた聖母像の表象との連関から、より実証的な考察に基づいて分析し、同障壁上の《聖母像》(1230年頃)とともに《騎馬像》を一組の「雅歌の夫婦像」として新たに解釈する試みである。この解釈は雅歌註解家として影響力をもったオリゲネスによる「騎馬像としての雅歌の花婿」の解釈、すなわち他の雅歌表現にも反映されている婚礼の神秘主義を表現の基盤とみなす。

まず、近年の科学調査の新たな発見に基づく当時の展示位置と色彩の再現を参照しながら、個々の彫像から全体のイメージ・プログラムへと導く視覚の効果、さらには、ゴシックにおける身振り、視線、衣襲の方向性としての観者への示唆を分析することにより、《聖母像》と《騎馬像》の神聖化、雅歌の表現、そして背後にある委託者の意図を追う。

この雅歌のプログラムには、当時の雅歌註解の傾向を示す《聖母戴冠》の主題が、《聖母像》の隣の《冠を掲げる天使像》とともに組み入れられている。本発表では、とくにプログラムの中心に置かれた予型論解釈における人物像、《騎馬像》《聖母像》《老婆像》《シナゴーグ像》を取り扱う。これら四体は、当時の国際様式であるランス大聖堂様式の影響を経験したバンベルク大聖堂の新工房のマイスターが完成したとされ、その影響は単なる様式的形態にとどまらない。

さらに本解釈を裏付けるのは、聖堂内への入場から始まる誘導の意図である。バンベルク大聖堂の聖ゲオルク内陣障壁における彫刻プログラムは、「君侯の門」から入堂した「貴族・騎士階級」へ特別に用意されたイメージ・プログラムであったと推測される。この、「君侯の門」から聖ゲオルク内陣障壁に至るイメージ・プログラムに、「雅歌」という特定の主題が採用された背景には、彫刻群の委託者とされる、神聖ローマ帝国皇帝フリードリヒ2世とバンベルク司教エックベルトの意図、社会的、宗教的背景や宮廷文化の諸相、そして当時流行した神秘主義思想がみられる。

本発表における解釈は、ドイツ・ゴシック彫刻においても、ゴシック的自然表現や人間

性の表現が卓越性を認められているバンベルク大聖堂彫刻工房作品について、今まで先行研究において十分になされていなかったといえるゴシック特有の視覚性の関与の分析、ゴシック美術におけるイメージの効果への考察に基づいている。こうした視覚の機能への着目は、バンベルク大聖堂彫刻群を、教会の特別な関心が向けられた宮廷文化を背景とする観者層に向けたイメージ・プログラムの一例として、ゴシック美術における大聖堂、修道院や宮廷といった場を超えた特定の視覚性とイメージの交流を示すこととなる。

(京都大学)